

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652081

研究課題名(和文) 中期・近代インド・アーリア語の通時的言語要覧

研究課題名(英文) Diachronic linguistic survey of Middle and New Indo-Aryan languages

研究代表者

小林 正人 (Kobayashi, Masato)

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：90337410

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究において、申請者はインド、ウッタルプラデシュ州とジャールカンド州での現地調査を行い、サドリー語とボージプリー語の調査を実施した。従来両言語は方言の関係にあるとされてきたが、受身形の作り方などいくつか重要な点で相違があることが明らかになり、別の言語として扱ったほうが適切であることが明らかになった。これは従来の方言地図で一つのもので扱われてきたビハール語群の分類に再考を迫るものである。

研究成果の概要(英文)：In this research, we conducted linguistic fieldwork in the Indian states of Uttar Pradesh and Jharkhand, and studied the languages Sadri and Bhojpuri. These languages have been considered to be in dialect relationship. However, study of their verbal systems revealed that they should rather be treated as different languages. This result requires us to reconsider the grouping of the so-called Bihari languages, which have been treated as a subgroup of Indo-Aryan languages.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：インド・アーリア語 歴史言語学

1. 研究開始当初の背景

インド・ヨーロッパ語族の一派であるインド・アーリア語派は、『リグ・ヴェーダ』以来 3,000 年にわたる文献と、南アジア諸国に 10 億人近い話者をもつ言語群であり、古期、中期、近代の時代区分に分けられる。サンスクリットに代表される古期インド・アーリア語、パーリ語やアルダ・マーガディー語に代表される初期の中期インド・アーリア語、現代ヒンディー語や現代ベンガル語などの近代インド・アーリア語についてはつとに研究が進んでおり、文法や辞書が一通り整備されているが、およそ紀元 6 世紀から 15 世紀に相当する中期インド・アーリア語の後期と近代インド・アーリア語の初期に関しては、少数の研究(Tagare, Nara, Bubenik など)があるのみで、参照文法や辞書がほとんど書かれていない。例えばインド・アーリア語の最新の知見を収めた Cardona & Jain 2003 でも、6 世紀から 15 世紀の言語については、1,000 ページ中で合計 40 ページ程度しか割かれていない(第 6 章など)。古典研究がさかんだったインドにおいても、この時代の文献を読める学者はジャイナ僧など少数を除いてほとんどが引退しており、注釈なくしては読解できない状態にある。

このような世界的低迷の中、わが国においては、ジャイナ教やインド・アーリア語の韻律の研究が近年盛んになっており、中期・近代インド・アーリア語の研究で世界をリードできる可能性がある。

【本研究の着想経緯】

申請者は、古インド・アーリア語の音韻史で博士論文を書き以来、ドラヴィダ語族、ムンダ語族も含めた南アジアの言語史を研究してきた。インド・アーリア語の史的発展を研究する中で、現在南アジアに見られる多様な発展を説明する鍵となる、中期インド・アーリア語と初期の近代インド・アーリア語の理解が決定的に不足していると感じた。たとえば紀元前 3 世紀ごろの各地方言を反映する「アショーカ王碑文」などから、ビハール地方では r と l が l に合流したと考えられているが、現代のビハールの言語では r と l の区別があるのみならず、l が r と合流する現象が見られる。こうした現状を理解するためには、残っている各時代の文献から、言語特徴を抽出して、時系列に整理することが基本作業として必要であると痛感した。

2. 研究の目的

南アジアに広く分布するインド・アーリア系言語の歴史において、中期インド・アーリア語の後期、近代インド・アーリア語の初期に相当する 6 世紀～15 世紀の言語については、文法記述や辞書がきわめて少なく、未解読または解読困難な文献が多く残っている。存在は知られているがいまだ翻訳もされていない、これらの中期および近代インド・ア

ーリア語文献の読解を通して、それぞれの文献の言語的特徴を共通フォーマットの言語サーベイにまとめ、中期、近代インド・アーリア語の通時的参照文法を作成するための基礎資料とすることを目指す。

3. 研究の方法

なるべく多数の文献から語彙・文法を抽出し、比較するのを容易にするために、用いるテキストを電子テキスト化して、タグ付きコーパスを作成する。次に言語記述のための音韻・形態・統語・語彙・韻律の調査項目を設定した共通フォーマットの調査票を作成し、そこに各文献の言語的特徴を記入する。併せてグロス付きのサンプル・テキストを添えて、文献それぞれについて 10 ページ程度で言語的特徴が分かるように記述する。最後に、それらを比較して系統別に分類し、冊子にまとめる。

申請者は、インド・アーリア語の音韻・形態・統語法の通時的発展過程を辿る歴史文法を書くことを最終的目標としている。しかし中期インド・アーリア語の後期から近代インド・アーリア語の初期にかけての文献は、その前後の時代を参考に推測しながら読むしかない状況で、1000 年近い時代の言語の状況が分からなければ、どのように近代インド・アーリア語に分化していったかを知ることができない。事実に基づいた記述を行うためには、前段階として各地域、各年代の文献を読み、音韻的・文法的特徴と言語サンプルを抽出することが必要である。本研究の期間内には、まずどのような文献が現存しており、それぞれがどの地域・時代に属するかを同定する。その上で、音韻交替や活用形や語順など各文献の言語的特徴を共通フォーマットで簡潔にまとめた「中期・近代初期インド・アーリア語の言語サーベイ」を作成し、歴史文法作成のための基本資料を整備することを目指す。

中期インド・アーリア語の文献は、ジャイナ教や仏教の研究者によって教義研究のために読まれている。また初期の近代インド・アーリア語文献も、ヒンディー文学の研究者によって文学研究のなかで読まれている。これらの研究分野は交流が少なく、また言語の記述を目的とした研究が少ない為、言語のよりよい理解につながるような研究成果が出にくい状況にある。

本研究では、これらの研究成果を活用して、中期インド・アーリア語と近代インド・アーリア語を、言語記述という共通の枠組みにあてはめて「通時的言語要覧」を作成することを目指しているが、そのような分野横断的な試みはこれまでなされておらず、また本研究の成果は哲学系・文学系・言語系すべての研究に貢献するものとする。

南アジアの言語の共時的サーベイとしては、20 世紀初頭に Grierson のもとで行われた Linguistic Survey of India があるが、本研

究はインド・アーリア語の通時的なサーベイを目指す。

中期インド・アーリア語や初期の近代インド・アーリア語の文献には、Gāhārayanakosaのように出版されているが何語で書かれているか同定されていないものや、Prithvirājraśoのように言語や内容は分かっているも理解して読解するのが難しいものなどがあり、研究者は注釈や他時代の辞書などを手がかりに読んでいます。

今回の研究で、さまざまな時代・地域の文献について簡潔な文法・語彙の記述を行うことにより、このような読解しがたい文献を同定して理解するためのレファレンスとなることが期待される。

インド・アーリア語の変遷を理解する意義は、インド・アーリア語の言語史のみにとどまらない。例えばドラヴィダ語族の諸言語には、さまざまな地域・時代のインド・アーリア語からの借用語が見られるが、どの地域・時代が同定できれば、ドラヴィダ語族の言語がどこを経由したかといった前史を明らかにすることができる。

4. 研究成果

本研究において、申請者はインド、ウッタルプラデシュ州とジャールカンド州での現地調査を行い、サドリー語とボージプリー語の調査を実施した。従来両言語は方言の関係にあるとされてきたが、受身形の作り方などいくつか重要な点で相違があることが明らかになり、別の言語として扱ったほうが適切であることが明らかになった。これは従来の方言地図で一つのもので扱われてきたビハール語群の分類に再考を迫るものである。

一例を挙げると、Jordan-Horstmann 1969:86 が Perfect II と呼んだサドリー語の完了の一形態では、

bambai mor dekh-al ahe
Bombay I.GEN see-PST.PTCP be.PRS.3SG
「ボンベイは私によって訪ねられた(見られた)ことがある」と

moē u-ke dekh-al ahō
I he-ACC see-PST.PTCP be.PRS.1SG
「私は彼を見たことがある」

のように、完了と受動完了が同形になる現象が見られる。同様の現象をボージプリー語で探査したところ、

ū hamrā dwārā dekh-al gail
he I.GEN by see-PST.PTCP go.PST
彼はわたしによって見られた。

ham ū kitāb parhale bānī
I that book read.PF.PTCP AUX
私はその本を読んだことがある

のように別形式となり、決して同形では表しえないことが明らかになった。

当初目指していた中期インド・アーリア語や初期の近代インド・アーリア語の分析はまだ成果の出る段階ではなく、サドリー語の分析も別言語の論文の一部としてしか公表できていない。その意味で計画を十分に達成することはできなかったが、言語の分類に関して予期していなかった発見ができた点で有意義であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

Ryutaro Takezaki, 2014. ボージプリー語の動詞組織について. Tokyo University Linguistic Papers 35. (受理)

Masato Kobayashi. 2014. Origin and development of Indo-Aryan -yy-. *Proceedings of the 14th World Sanskrit Conference*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Masato Kobayashi, 2012. The stative passive construction in Kurux. Tokyo University Linguistic Papers 33. 119-131.

[学会発表](計 0件)

[図書](計 0件)

[産業財産権]
出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 正人 (Kobayashi, Masato)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：90337410

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：